第一章　21世紀を生きる三原学園の子どもたちのために

1　幼小中一貫の教育力を生かして育てる

(1) 幼小中一貫での教育の歩み

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校(以下本学園と略す)においては，幼稚園から中学校まで完全連絡入学制をとっており，子どもたちは12年間を同一敷地内で学んでいる。また，幼小中での共有スペースや運動会などの学園全体で行う行事などがあり，子ども達の学校生活は，自然につながりをもって展開されている。

また教育研究に関しても，過去において多面的・断続的に幼小中一貫教育の研究を推進し，研究の成果を研究会，刊行物等で公開してきた経緯がある。

ここでは，平成10年度から幼小中一貫教育研究を継続してきた教育研究の歩みをまとめてみたい。

この研究の目的は，幼小中12年間を一貫した教育理念で貫き，子ども達に将来にわたって必要な資質としての社会性，すなわち，人と豊かにかかわり合う力を育成することにあった。第１期の平成10年度は，幼小中の全教職員が校種を超えて「表現」「集団」「環境」の３つの縦割り部会に所属し，子ども達の実態把握をしながら幼小中一貫教育の理念や方法を模索した。第２期の平成11年度から平成12年度にかけては，系統的な支援に基づく保育・授業づくりをめざして，保育・教科・領域・総合部会において，「表現」「集団」「環境」の３つの部会で明らかにしたことを保育・授業で具現化してきた。第３期の平成13年度は，幼小中12年間の一貫教育カリキュラムを開発した。そして，第４期の平成14年度からは，幼小中一貫のカリキュラムに検討を加えながら，保育・授業を実践した。

こうした教育研究の歩みを継承しながら，平成15年度は幼小中一貫の教育力を生かし，新たな一貫教育カリキュラムである21世紀型学校カリキュラムの研究開発を行おうとしているのである。

(2)「幼小中一貫教育」その意義と成果

本学園の幼小中一貫教育により，子どもたちは身近な人と豊かにかかわり合う力を確実に身につけてきた。例えば，異校種・異学年交流として，園児と小学生，小学生と中学生，園児と中学生といった校種を超えた形での合同授業を行う中で，子どもたちは幅広い人間関係の中で人とかかわる喜びや充実感を味わうことができるようになってきている。また，幼小中合同の運動会などの行事で，自分の仕事に責任をもって取り組んだり，授業や部活に前向きに取り組もうとしたり，校則を守ろうとする姿勢が見られたりするようになってきた。

このように幼小中一貫教育は，12年間という長い期間の中で，じっくりと系統的に支援・指導することができることから，子ども達に幅広い豊かな人間性を育んでいくことができる。更には，幼小中の教職員が，お互いの教育内容・教育方法などを理解し連携を取りながら教育研究を進めることで，各校種の教育の独自性と連続性，そこでの教育評価の大切さ等を学ぶことができ，子どもの成長だけでなく教師の資質を高めていくこともできるのである。

また，幼小中一貫教育カリキュラムを開発したことにより，幼小中の子どもたちの実態を，教職員同士が系統的に把握しやすくなり，お互いの連携を生かした保育・授業を考えることができるようになった。何よりも幼小中の教職員が共通の視点で話し合ったり，研究の時間を共有したりすることにより，お互いの垣根が低くなり，共通のまなざしで子どもたちを見つめようとする姿勢が養われてきている。

例えば，中学生の実態や教職員の悩みを具体的に聞くことで，幼稚園や小学校の教職員も12年間というスパンを踏まえながら，自分の所属する校園の子どもたちを見つめ直し，今，この時期に必要な経験や支援は何なのだろうかということを真摯に考えてかかわろうとするようになってきた。そして，各所属校園でも子どもたちに対する接し方を確認し合い，学園の教職員全体で子どもたちにかかわるようになってきた。

先に述べた子ども達の変容は，このような教職員の変容にもとづくものであると，わたしたちは考えている。幼小中一貫教育を進めることで得られた子どもたちの変容の手応えが，教職員に喜びと勇気を与え，次なる教育研究への意欲へと繋がっているのである。

2 21世紀を生きる人間として大切な資質を育てる

(1) 21世紀の社会情勢，グローバル化・高度情報化・超少子化

私たちの生きている21世紀の社会の情勢は，日々加速度的に変化している。今起こったことがすぐさま忘れ去られ，1年後の自分たちの姿がどうであるかの見通しもつきにくい。これは，教育界においても同様である。

さて，21世紀の社会情勢を語る時，グローバル化・高度情報化・超少子化については，けしてはずすことはできない。

海外旅行や海外生活の経験を持つ子どもの数や，日本に滞在している外国人の数が年々増加していることは，普段の生活の中ではっきりと感じとることができる。また，各家庭におけるコンピュータの普及率は高く，家庭でも学校でも子ども達の学習や遊び，インターネットなどによる情報の収集などに活用されている。21世紀を生きる私たちの生活の中に様々な情報が簡単に飛び込んでくるようになり，世界がより身近なものになってきている。このことは，グローバル化・高度情報化による私たちの生活の大きな変化である。

しかし，コンピュータをはじめとする様々なメディアによる情報の氾濫は，あまりにも簡単に世界の情勢を目の当たりにすることができるため，実感を伴わない中で「世界がとても身近なものになった」と勘違いすることにもつながる。また，様々な情報にとり囲まれることによって，自国のよさや今まで大切にしてきた文化が多々あるにもかかわらず，世界の情勢にのみ関心が高まり，自国を含むグローバルな視野でものを見たり考えたりすることを阻害されていることもある。そして情報の氾濫は，子ども達を偏った考え方に導いたりとまどわせたり不安にさせたりしていることもあるのである。

また，超少子化によって，子ども達は人とうまくかかわり合う力を身に付けることができにくく，その結果反社会的行動や自己閉鎖的行動等に陥っていることが指摘されている。大人ですら自分の夢や希望のもてない現状に対して，特に思春期の子どもたちは，自己中心的な行動や考え方から抜けきれないでいる。さらに家庭教育の崩壊などから，低年齢の子どもたちは，愛情不足・希薄な人間関係・生活体験の未熟さなどの影響で，痛ましい事件に巻き込まれてもいる。

私たち教育に携わる者は，今こそ21世紀の急速に変化する社会情勢を見極め，そこで生き抜いていくために必要な力を明らかにし，それらを子ども達に育てていかなければならないと考えるのである。

(2)「ユニバーサル・シティズンシップ」

21世紀の急速に変化する社会情勢の中で生きる人間にとって，大切な資質とは何か。私たちは，それをユニバーサル・シティズンシップとよび，「どんな国・どんな時代に生きようとも人間として普遍的に大切な資質」と意味づけた。そして，教育の力で子ども達にユニバーサル・シティズンシップを身につけさせることが，21世紀の社会情勢の中で自己を肯定し自己確立できる人間を育成することであると考えた。

本学園では，ユニバーサル・シティズンシップの要素を次のように考えている。

＜本学園の考える「ユニバーサル・シティズンシップ」の要素＞

○国際的コミュニケーション能力

「確かな学力を基に，様々なメディアを駆使して多文化を理解したり，人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」

○21世紀型教科学力

「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな学力」

○人間関係力

「広い視野に立ち，より直接的・体験的に他者や集団と豊かにかかわり合う力」

21世紀を生きる子ども達には，このような力がバランスよく育成されることが大切であると考えるのである。

3 本学園のめざす子どもの姿

本学園には，本学園の教育理念である大正13年に制定された自伸会の信条がある。(自伸会とは，児童会および生徒会にあたるものである。)その信条とは，次の三条から成り立っている。

①「私たちは　私たちの力で　伸びていこう」
②「私たちは　人のためにつくして　感謝しよう」
③「私たちは　私たちのきまりを　尊重しよう」

①は子どもの自主性を育てる側面で自己実現をめざす子どもの姿，②は連帯性を育む側面で共感的理解を伴う自己尊重の気持ちを培う姿，③は自律性を陶冶する側面で学校や地域社会の一員であるという自己概念の形成をめざしている姿を表している。

そして，現在でもこの三つの信条を幼稚園・小学校・中学校の教育目標として，子ども達の発達に即した内容で継承している。

そこで私たちは，本学園のめざす子ども像を本学園の教育理念である自伸会信条の考え方，21世紀初頭の社会情勢，「ユニバーサル・シティズンシップ」の要素の３つから，次のように設定した。

＜本学園のめざす子ども像＞

○目標(夢や希望，志)をもち続ける人間
○自分の個性(よさや可能性)を輝かせて生きる人間
○広い視野に立って，まわりのことを考え，適切に判断し，行動できる人間
○自分の感情をコントロールしながら人間関係や自分の生き方，行動を調整できる人間
○どんな社会でも，どんな時代になってもしなやかに生きていける人間

私たちは，この「本学園のめざす子ども像」を実現するために，今年度からの研究開発を進めていく。